

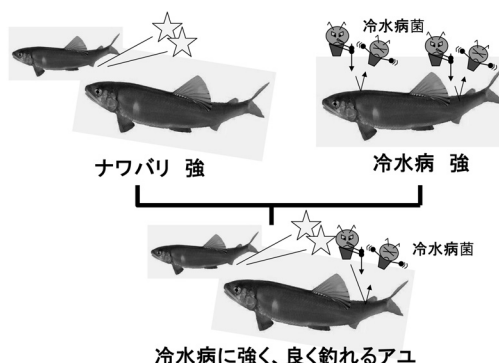
河環研だより

No.4
'07. 5月15日

平成19年度主な研究課題を紹介

課題名：冷水病に強く良く釣れる人工産アユ種苗の開発とその有効利用に関する研究

研究所で開発した琵琶湖産系人工産種苗は、友釣りで良く釣れるという利点と冷水病に弱いという欠点を併せ持つことが分かりました。一方、研究所で開発した海産系人工産種苗は、釣獲特性が優れないものの、冷水病に強いという利点を持つことが確認されました。そこで両者の利点を併せ持つ種苗の開発を目指して、選抜育種を行っています。また、放流試験によりそれらの最適な放流時期や放流サイズを明らかにします。(資源増殖部 桑田知宣)



水田との連続性が保たれた水路メダカなどが多数生息している。

課題名：水生生物の移動経路および生息場所の分断化がその生態等に与える影響について

水域の連続性の有無が水生生物の生態に及ぼす影響を評価し、水生生物にとって健全な水域環境のあり方を示すことを目的とします。上流域ではカジカ類を対象として、河川工作物の影響を評価します。平野部では、水田や周辺水路の分断化の与える影響について評価します。得られた成果から、関係機関等に対して、水域の連続性の重要性をアピールし、より健全な水域環境のあり方を提言していきたいと考えています。(生態環境部 大原健一)

課題名：地域連携型開発プロジェクト「環境調和型森林整備手法の開発と実用化」

当プロジェクトは、森林研究所・保健環境研究所などの共同研究です。河川環境研究所は、水域に関する部分の調査や実験を担当し、今年度からは、新たに濁水を使用した水槽実験に着手しました。この実験では、種々の濁度条件において、溪流魚や水生昆虫の採餌行動、藻類の光合成速度を検証する予定です。

また、下呂支所の水路を使用して、魚類が定着しやすくなるよう緩流部を造成する野外実験にも取り組んでいます。(下呂支所 岸 大弼)



水槽実験の様子

ウシモツゴ親魚交換会

～遺伝的多様性を考慮した繁殖に向けて～

絶滅のおそれがあるウシモツゴの繁殖を目的とした2回目の親魚交換会が4月26日、各務原市の岐阜県世界淡水魚園水族館「アクア・トトぎふ」で行われました。交換会には、「ウシモツゴを守る会」の関係者30人が参加し、約1000尾を交換しました。「ウシモツゴを守る会」は、ウシモツゴの保全対策を目指す官民横断組織で、岐阜・美濃生態系研究会、アクア・トトぎふ、関市、美濃市、県博物館、県河川環境研究所が参加し、平成17年7月に発足しました。同会では、親魚を交換することで、各機関で繁殖させた親魚と他の機関から導入した親魚を交配させ、近親交配を最大限に避けようと考えています。今後、繁殖させたウシモツゴは、関・美濃市の適地に放流する予定です。



河川環境研究所から関市へ譲渡

平成18年度研究成果発表会の開催

平成19年3月2日および5日に、研究所の研究
成果発表会を下呂市と各務原市で開催し、両日
で91名の方に出席いただきました。

今回の発表会は、「さかな王国の復活をめざして」というコンセプトで、発表した8課題を「豊かで健全な水域環境をめざして」、「アユに侵入した冷水病菌を追跡する!」、「どんな放流が効果的か?」の3つのセッションに分け、出席する方が興味のある課題だけでも参加し易いように配慮しました。またこの他に、「当所の環境教育の取り組み」についてもトピックとして紹介しました。発表内容に対する質問や、今後取り上げてほしい研究課題など、多くの意見をいただきましたので、今後の研究方針に反映させていきたいと思ひます。



発表風景

調査研究への協力についてお願い!

冷水病菌を保菌していないアユ種苗の放流効果と小型種苗の早期放流の効果を明らかにするため、木曾川水系飛驒川支流竹原川(益田川漁業協同組合管内)に鱭(ヒレ)を切って標識した4種類のアユ種苗を放流して追跡調査をしています。標識として切除した鱭は、右腹鱭、左腹鱭、脂鱭+右腹鱭、脂鱭+左腹鱭です。竹原川で標識したアユを釣られた方は、下呂支所(内線405、担当:原)までご連絡をお願いします。



昨年の解禁前の標識アユ

河川環境研究所が科学研究費補助金の指定機関となりました。

河川環境研究所は平成19年3月26日に科学研究費補助金対象の指定機関となりました。科学研究費補助金とは、我が国の学術を振興するため、人文・社会科学から自然科学まであらゆる分野で、独創的・先駆的な研究を進展させることを目的とする研究助成費です。今後は、科学研究費補助金を始めとする外部資金の獲得と、更なる研究活動を推進したいと考えています。